



左から、大杉正明、杉田敏、遠山顕。NHK ラジオ英語のレジェンド3人が5年ぶりに集まった。

## 鼎談

杉田 敏 × 大杉正明 × 遠山 顕

# ラジオ英語のレジェンドが語る 「日本人と英語」

外国語を学ぶ人なら一度はお世話になったであろう、ラジオの語学講座。NHKの英語番組を長年担当してきたラジオ講座のレジェンド3人が集結した。日本人と英語の変遷、自らの英語との付き合い方、これからの英語について、存分に語ってもらった。

杉田 私と大杉さんは同じ年、一九八七年からNHKのラジオ講座を始めました。遠山さんは少し後ですよ。

遠山 はい。九四年の「英会話入門」からです。杉田 で、私の「実践ビジネス英語」が終わったのが、昨年三月。お二人は？

遠山 「遠山顕の英会話練習」が昨年の一〇月で終わりました。

大杉 僕は「ラジオ深夜便」の「大人の教養講座」のコナナーを二〇一七年の三月までですね。杉田 それぞれ始めたきっかけは何でしたか？

大杉 ちょうど四〇年前に、何の前触れもなくNHKの人から電話がかかってきたんです。会いたいって。会ってみたら、英語のテレビ番組を作っている人で、「仮に、これを見れば」という動詞がすべてわかる、二〇〇三〇分のテレビ番組を作るとします。あなただったら、どう



# Part 1 外国語を 学ぶとは？

人はなぜ外国語を学ぶのか？ その何が魅力なのか？  
大学、ラジオ講座などで各国の言葉の魅力を伝えてきた泰斗たちが  
外国語、異文化との出会い、学ぶことによって広がる可能性について語る。

いう内容にしますか？」って、いきなり聞くんですよ。go to comeを対比させるとかなんとか思いつきを言ったら、「あ、それいいですね」と言われ、「あなたオーディション受けてください」って。オーディションって、普通はこっちから応募するものなんですけど。そのままスタジオに連れていかれて、日本語で喋ったり、英語で喋ったり、アメリカ人と英語で対談したりしました。それで「英語表現入門」というテレビ番組をやることになりました。その後、ラジオに移ったわけです。

**遠山** 僕は八一年から一二年間、文化放送「百万人の英語」を担当していました。終わって一年後にNHKから電話で、新番組編成委員会で僕の名前が挙がったからお話をしたいと。渋谷に行ったら、新スタートの四番組の紹介がありました。僕はずっと演劇をやっており、演劇的要素のある会話に特化した講座を「英会話入門」という番組でやってみたいと申し出ました。その後、正式依頼があり、執筆・会話の演出、イントロ・効果音やイラスト指示・対訳の位置までイメージしてこころ躍らせ、ラジオの面白さや効果をそれなりに理解したこともあり、私なりのアドベンチャーを「英会話入門」で始めさせてもらった次第です。

ったと。僕は新天地がむしやらに、かつ楽しく番組をやっていました。このハガキを読んで初めて、皆さんと深くつながったように感じました。以来、昨年番組を終えるまで、担当したいくつかの番組のオープニングはすべてドアチャイムにしてみました。

**杉田** 私も多くの人が、本当に熱心に聴いてくださったことが印象に残っています。数年前に会った知人に「この三十数年間、番組を聴き逃したことは一度たりとありません」と言われたときには驚きました。海外に行った際に、「駐在員になったのは、先生の番組を聴いていたおかげです」と言われたことも何度かあります。勉強熱心なリスナーに支えられてきたのだと思います。それから私がミスをしなないように、いつも気を配ってくださったスタッフの皆さんにも感謝です。

**大杉** 私もお二人と同様の想いです。私は無名の教員でしたが、ラジオ「英会話」を担当して間もなく全国から講演の依頼がきて驚きました。北海道から沖縄まで、週末はほぼ毎週講演に行きました。学校と教員の研究会が多かったですね。小学校から大学まで。そこで出会った皆さんと友人になりました。私の貴重な財産です。例えば、三〇年以上前に帯広に講演に行き知り合



杉田 敏

すぎた さとし 昭和女子大学客員教授。1944年、東京都生まれ。青山学院大学経済学部卒業。「朝日イブニングニュース」記者、オハイオ州立大学留学、「シンシナティ・ポスト」記者を経て、日本ゼネラル・エレクトリック取締役副社長、パソン・マーステラ（ジャパン）社長、ブラップジャパン代表取締役社長などを歴任。NHKラジオ講座「実践ビジネス英語」の講師を通算32年半務める。著書に「英語の新常識」（インターナショナル新書）、ムック「杉田敏の現代ビジネス英語」（NHK出版）など。

**杉田** 私のきっかけは、一九八一年に旺文社から「戦略的ビジネス英会話」という本を出したことです。それを讀んだNHKのプロデューサーが、当時はまだ「ビジネス英語」をテーマにした語学番組がなかったの、声をかけてくれました。そこでビニエツト（ミニドラマ）を主軸にした「やさしいビジネス英語」という番組が始まったのです。「六カ月間だけやってもらえれば、後は再放送でいいので」と言われ、軽い気持ちでスタートしたのですが、それが通算三年半も続き、放送史上最長寿の語学番組になり、累計三〇〇万部のテキストが売れるようになるには夢にも思いませんでした。

ところで私たちは、長年にわたってラジオ番組に関わってきたわけですが、振り返って、いさばん印象的だったことは何でしょうか。杉田 「英会話入門」がスタートした翌年の九月の一月、あるリスナーからハガキが届いたんです。崩れた家の前に呆然と座っていた早朝、「ピンポン」というチャイムが聞こえた。それで、また新しい日が始まるぞと元気が出たとありました。阪神・淡路大震災の翌朝、被災した方がラジオを聴いて、ハガキを書いてくれたんですね。講座はドアチャイムが始まり、僕がCome on. E. と言う。ドアがギイと開き、リスナーの皆さんが入ってくる、というイメージにしたわけですが、その方にとって、番組のチャイム音が、被災翌日の新しい一日を始める合図にな

った方とはいまだに連絡を取り合っていますし、たまに一緒にジャズを聴きに行ったりしています。番組のおかげですね。感謝しています。

### 才能か、努力か。語学学習には「適性」もある

**杉田** 英語学習は本質的に楽しかったですか？ それとも苦しかったです？

**遠山** 僕は楽しかったです。英語との出会いは、エルヴィス・プレスリーでした。一九五六年頃、ある日ラジオを聴いたら流れてきた。エコーのような、天から降りてくるような響きがあつたね。以来、英語の歌をよく聴いたし、自分でも歌いました。ほほ赤児あかこの喃語なんごのようなものでしたが。当時は日本人の歌手も、英語で歌っていましたがよ。美空ひばり、雪村いづみ、江利チエミ……。英語で歌うことは憧れでもあったし、身近なことでした。歌から入って、英語劇もや

ったし、ジョン・F・ケネディの演説を憶えたり、暗唱大会に出たりと。英語を憶え取り込もうとしていました。一〇代後半でマザーグースの面白さを知り、シェイクスピア劇で八〇〇行近いセリフを憶えたことなど、あの楽しさなしには続かなかったでしょう。

**大杉** 僕は教員になるまでは楽しかったです。教員になってからは苦しかったです。それはプロだから。英語でお金をもらうわけだから。すべての英語教員が英語をよくできるわけではないけれど、英語のできない英語教員ほど惨めです。いものはないでしょう。特に英語で論文を書くのがつらくて、締め切りが近づくと、交通事故に遭いたくなつたくらいです。

だから「やがて愉しき外国語」じゃなくて、「やがて苦しき外国語」だね。僕にとっては。定年退職して解放されました。

**杉田** 私の実感としても、語学はラクに、涙なしに上達するものではないのです。今、書店に行くと、「英語は勉強しなくてもうまくなる」式の本が売れているようですが、こうした「神話」が多くの学習者を間違えた方向に導いているのではないのでしょうか。

私自身は苦労して英語を習得してきたと思っています。上達した分だけ、失敗もしました。「何言ってるんだかわからない」と、面と向かって言われたこともあります。たくさん失敗、間違い、恥づかしい思いをしながら勉強してきたというの、英語学習に関する気持ちですね。

**遠山** ちょっとよろしいですか。楽しいだけの人間だと思われるといけないので付け加えます